

ごあいさつ

ごあいさつ

このたび、企画展「河野扶 向うからやってくるもの－作意を捨てて」を開催する運びとなりました。河野扶は1913（大正2）年、宮崎県児湯郡美々津町（現・日向市美々津）に生まれた、抽象画家です。厚塗りの技法をもとに、キャンバスに絵具を無作為に塗りつけ、乾いては削り、再び塗っては削る手法で、表現を展開しました。

1941（昭和16）年に東京帝国大学（現・東京大学）理学部数学科を卒業し、2002（平成14）年に亡くなるまで、河野は東京を生活の本拠としたことから、九州に河野の作品は多く残っていません。

本展では、異色ともいえる河野の画業を五つの章に分け、初期から晩年までをたどりまします。九州で初の回顧展として開催するこの機会に、表現の変遷をお楽しみいただくと共に、河野作品の魅力を知っていただく機会となれば幸いです。

本展の開催にあたり、快く御協力いただきました作家のご遺族、東御市梅野記念絵画館（長野県）、関係各位に対し心よりお礼申し上げます。

令和6年2月3日
高鍋町美術館

謝辞 凡例

謝辞

本展覧会を開催するにあたり、貴重な作品を貸与くださいました東御市梅野記念絵画館様、佐藤和男様・由起様をはじめ、作品調査・文献調査等に際しご協力、ご助言いただきました皆様に深く感謝の意を表します。また、お名前は差し控えさせていただきますが、本展覧会の実現のためにご尽力賜りました方々に、この場を借りて心からお礼申し上げます。(敬称略、順不同)

大竹 永明

佐藤 和男

佐藤 由起

高橋 章

宮本 哲

協力

東御市梅野記念絵画館

凡例

- ・本書は「河野扶展 向うからやってくるもの―作意を捨てて」(令和6年2月3日から3月3日 高鍋町美術館)の開催に際し出品された作品について収録している。
- ・図版の部分の作品情報については、作品番号(順路順)、作品名の順に表記する。
- ・図版の部分にて図版を並列している場合は、上から下、左から右の順に掲載する。
- ・展示作品は東御市梅野記念絵画館蔵または個人蔵である。
- ・作品名について、同じ題名のものが複数存在するが、そのままとした。題名が不明の作品については、題不明とした。
- ・インタビュー口述については、現存するVHSデータの中から河野扶が発言している部分のみを6カ所切り取り、会場で上映した。今回はその部分について書き起こした。

目次

ごあいさつ	p.1
謝辞	p.2
凡例	
目次	p.3
図版	p.4
河野扶の葛藤と文化的創造	p.20
年譜	p.26
講演会概要	p.28
映像「アトリエ訪問 河野扶」口述	p.29
展示風景	p.34
作品リスト	p.40
展覧会概要	p.43
写真提供	p.44



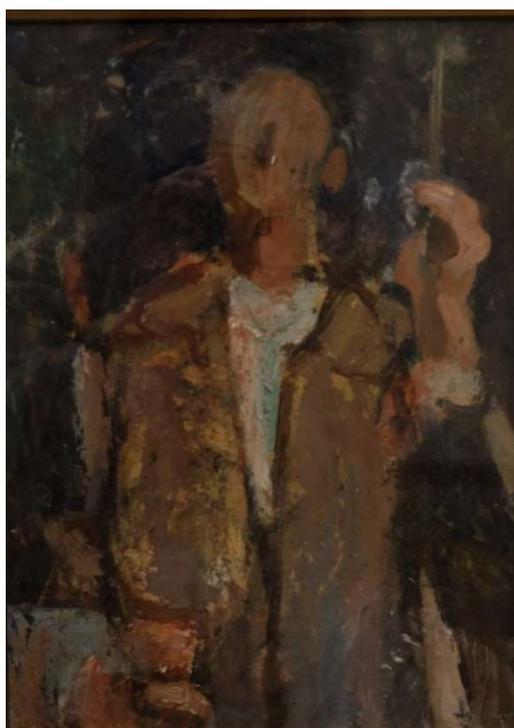
1 青い壺の静物



2 自画像



3 手をあげる裸婦



4 人物



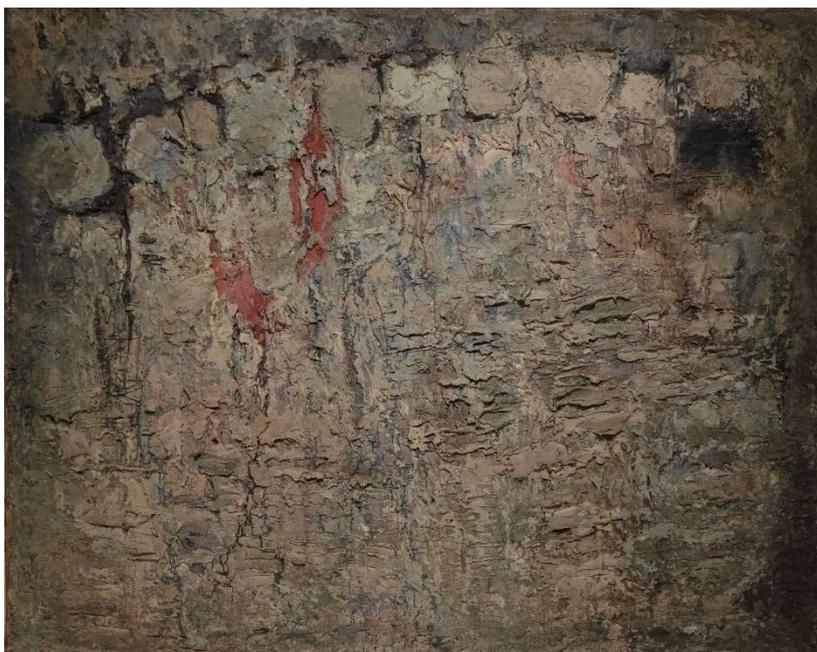
5 題不明 高見清一



6 小さな教会



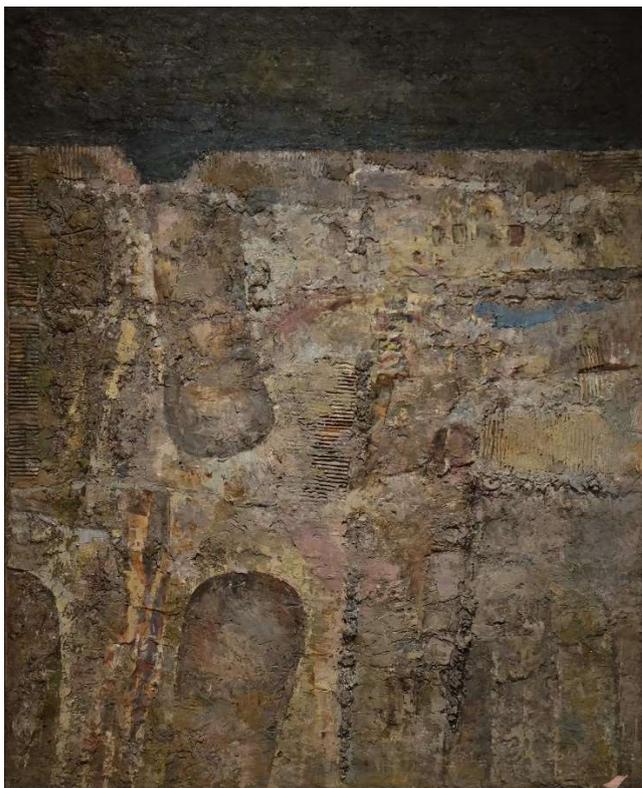
7 作品61-A



8 作品62-G



9 作品63-J



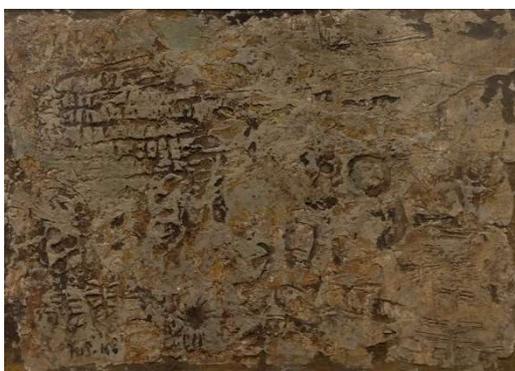
1 0 風景2



1 1 無題1



1 2 壁の詩



1 3 無題2



1 4 赤い崖



15 ローマ遠望



16 マゼ街



17 アパートのある風景



18 赤い屋根 (シャルトル水辺)



19 風景（作品2）



20 風景（作品1）



21 赤い風景



22 建物



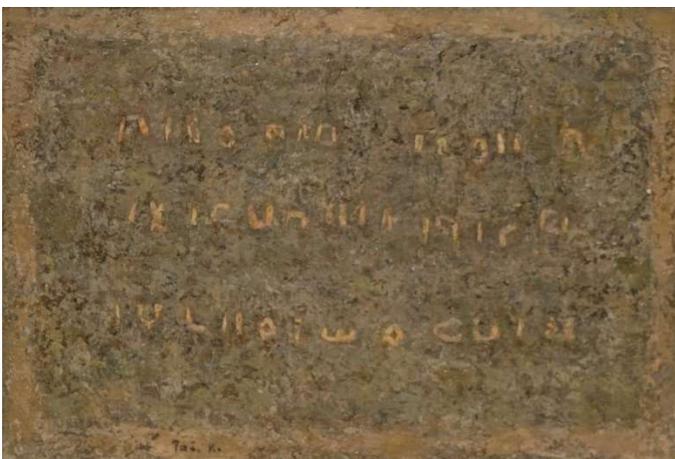
23 芽のある静物



24 パレット



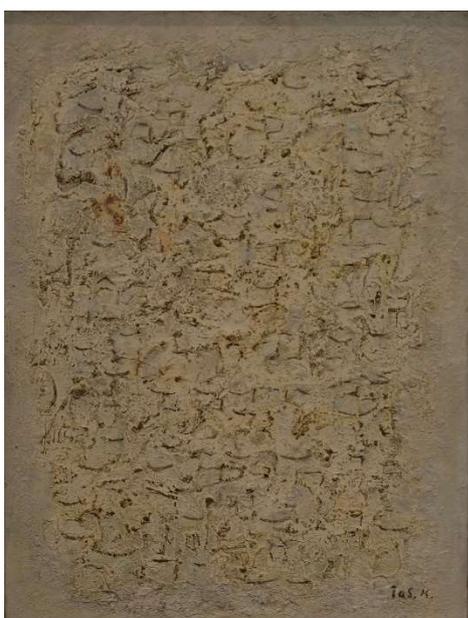
25 オルレアンの寺



26 モニュメント



27 蔵造りの店



28 壁の曼陀羅 4



29 放逸する形 1



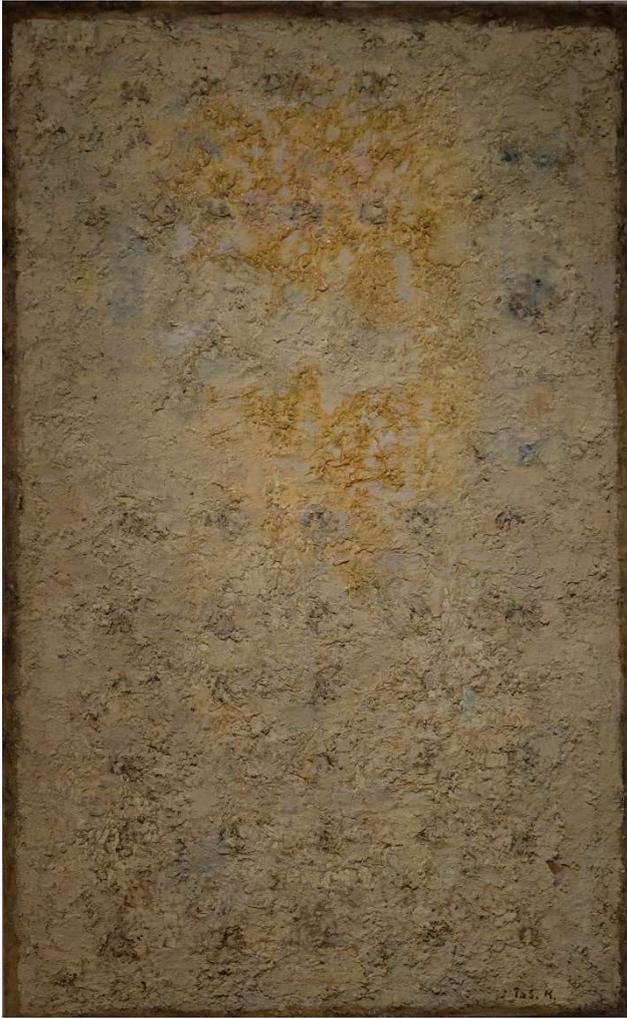
30 二つの形 2



3 1 埋没する相 2



3 2 赤の侵食



3 3 恣意空間



3 4 カオス1



3 5 気流



3 6 黒い気流1



37 刻印



38 無題1



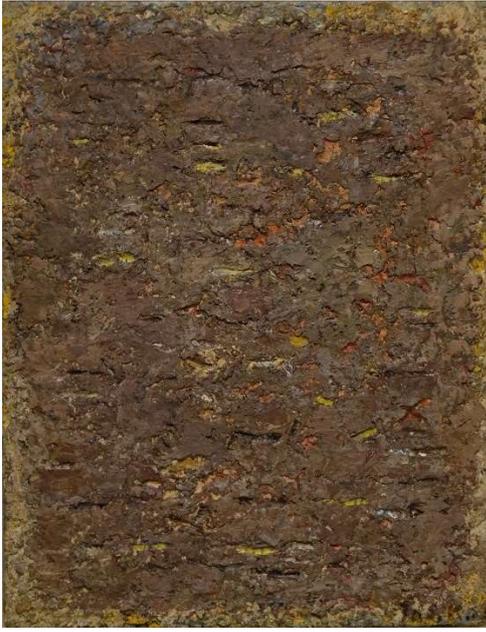
39 気まま空間



40 私の壁1



41 翳り2



4 2 私の壁1



4 3 犇めく2



4 4 とりとめのない空間1



4 5 私（わたし）の壁（かべ）2



4 6 恣（し）意（い）空（くう）間（かん）1



4 7 ある風（かぜ）景（けい）1



4 8 形（かたち）象（さう）1



4 9 形（かたち）の記（き）憶（えき）



5 0 けはい 1



5 1 私の壁 2



5 2 石化 2



5 3 遊戯空間



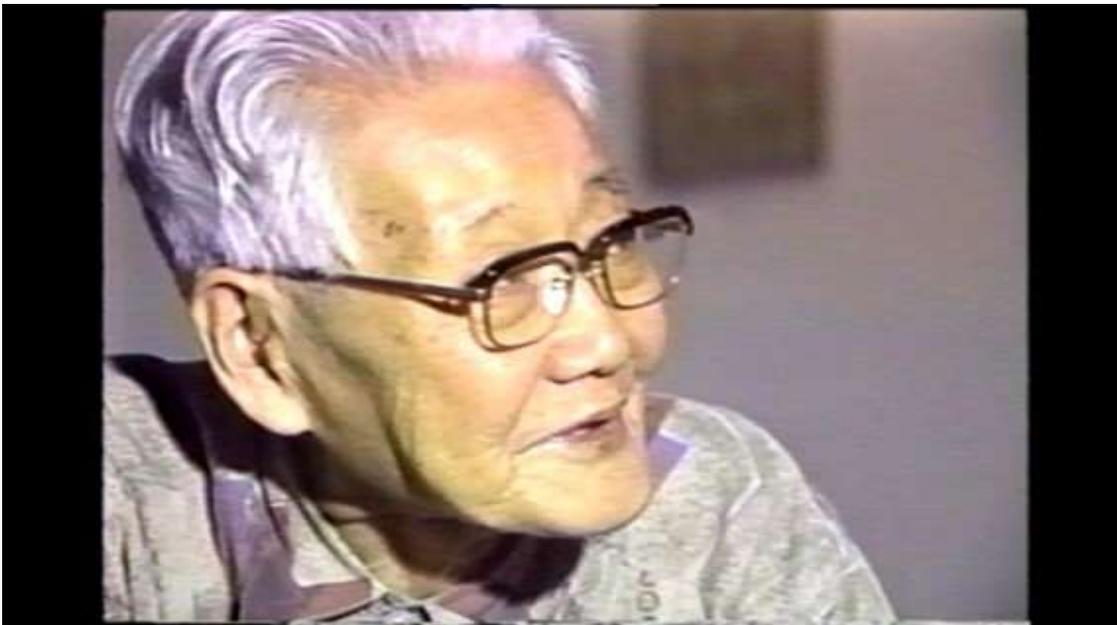
5 4 呪文の壁 (青)



5 5 呪文の壁 (赤)



5 6 けはい3



5 7 アトリエ訪問 河野扶
映像 約30分

河野扶の葛藤と文化的創造について

高鍋町美術館 学芸員 青井 美保

東京大学理学部を卒業し、数学の教諭を務めながら抽象画を描き続けるという異色の経歴をもつ河野扶（1913－2002）は、現在孤高の画家¹と評され、再注目されている。河野が自身の作風を確立するのは1990年代以降で、そこまでに河野は様々な葛藤のちに創造する行為を繰り返している。どのような葛藤と創造を経て、その作風を確立させたかについて、先行研究と、本展で明らかになった事実をもとに分析する。

はじめに、アントニ・タピエスが愛読したという岡倉天心の『茶の本』²にある、一文を紹介する。筆者は、河野の思想と通じるものを感じている。

“東西両洋は、立ち騒ぐ海に投げ入れられた二竜のごとく、人生の宝玉を得ようとすれどそのかいもない。この大荒廃を繕うために再び女媧^{じよか}を必要とする。われわれは大権化^{だいくんげ}の出現を待つ。まあ、茶でも一口すすろうではないか。明るい午後の日は竹林にはえ、泉水はうれしげな音をたて、松籟^{しょうらい}はわが茶釜に聞こえている。はかないことを夢に見て、美しい取りとめのないことをあれやこれやと考えようではないか。”

序の目標を論証するために本論では以下4点を述べる。第1は、師・有田四郎の存在についてである。河野は旧制高鍋中学を卒業後、2年にわたり東京美術学校を目指したが叶わず、その後3年間川端画学校で学んでいる。この時期、師事した有田四郎の存在は、河野のなかで一つ目の大きな創造の起点となる。有田四郎は、1885年東京に生まれ、東京美術学校で黒田清輝に師事している。また、芥川龍之介や有島生馬、和田栄作らとの交友関係があったことでも知られている。河野は、有田を師として大切に考え、大きな存在であり続けた。本展で展示された初期の作品《青い壺の生物》（1930年、河野扶、個人蔵）や《手をあげる裸婦》（1956年、河野扶、東御市梅野記念絵画館蔵）は、印象派の影響が見てとれる。《リンゴとオレンジのある静物》（1985－1900年、ポール・セザンヌ、オルセー美術館蔵）や、《水浴の女》（1887年、オーギュスト・ルノワール、ポーラ美術館蔵）と比較すると特徴を掴みやすい。有田四郎の師事した黒田清輝は、アカデミックな教育を基礎に、明るい外光をとり入れた印象派風の表現を日本に紹介した人物とも言われている。有田のその要素が河野へも伝播したことが想像できる。初期の河野作品を見ると、具象作家とし

¹ 宮崎日日新聞 2024年2月22日付

² 茶の本 岡倉覚三 1929年 岩波書店

でも十分に発揮できる表現力を持っているが、河野は同時期にフォービズム風の作品も描いており（《人物》（制作年不詳、東御市梅野記念絵画館））、具象を手掛けた時期から5年のうちに、“壁こねの時代”へと移っていくのである。本展出品作品によると、具象の時代を終えるのは当時43歳である。独立展で作品を出品するようになるのが、48歳である。河野は晩年になっても、有田の存在を近くに、そして大切に感じていた。それは、河野の記した随想メモからも見てとれる。

9月10日午前3時頃有田四郎先生に再会した夢を見る。健在ならもう百歳にはなられた筈の先生。その先生も夢の中では依然として50歳台。目覚めて改めて悲しみを噛みしめる。³

第2は、須田国太郎、壁派（アントニ・タピエス）、独立美術協会からの影響についてである。先述のとおり河野は1960年から5年にわたり独立展に作品を出品するのだが、ここに何か起因があるとすれば、それはやはり1935年から入学した京都第三高等学校理科甲類での生活のなかで、放課後に通っていた京都独立美術研究所での指導者・須田国太郎の存在が挙げられる。本展での第4章“壁こねを下塗りにした具象”や、第5章“作意が抜け落ちていく時代”の表現をとっても、須田の表現からヒントをもらったとも推測できる作品は複数ある。例えば《栲原》須田国太郎（1955年、アーティゾン美術館蔵）から、それを見てとることができる。一方で、この時期の河野作品を観て、ジョルジュ・ルオーの作風を思い浮かべた鑑賞者もいるだろう。河野は、ルオーについてこう語っている。

少々独断に過ぎるかも知れないが、ルオーの作品は西欧の画家には珍しく偶然性の効果にささえられた部分が非常に多いと思う。油絵具を幾重にも塗り重ねる制作過程の中で、この画家は意識すると否にかかわらず作者の意図を超越した別次元の要素を作品に取り込まざるを得なかったのではないか。⁴

筆まめな河野だが、有田四郎に比べると須田国太郎に対する思いは、殊の外少ない。しかし、河野が須田と出会って25年もの月日を経て、独立美術協会の会友となり、それまでのアカデミックな作風から一転、自身が“表現様式への抜き差しならぬ偏見から解放された”（1976年1月14日付け河野慶彦氏宛て書簡より）と語るように、アカデミックな作風からの脱却の大きな動向となったのは、言う間でもない。また、独立美術協会の結成の背景をたどると、“既存の団体からの絶縁”を宣言し、フォービズム的画風が独立の基調をなしたことも、河野が解放を目指した心情と合致したことが想像できる。また当時、独立には“壁

³ 随想メモ 1985年（72歳）

⁴ 随想メモ 1992年8月（79歳）

河野扶の葛藤と文化的創造について

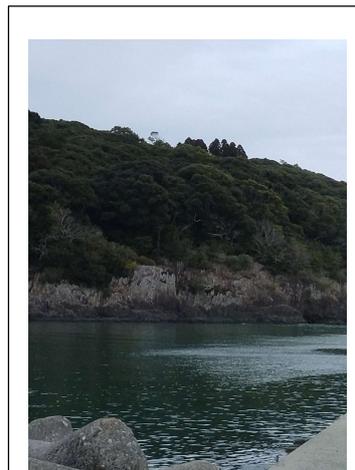
派”と呼称される表現が主流であり⁵、アントニ・タピエスに傾倒した画家たちが、油絵具に藁、糸、砂、粘土、大理石粉などを混ぜる手法を用いており、河野もそれに倣って、具象からの解放を遂げたのではないだろうか。また本展を機に、河野が幼少期を過ごした美々津へ足を運んだ。ここで、美々津ではありふれた光景である立ちのぼる岩壁を見た。独立展出品作品のなかに、それを思わせる作品も確認できる。長く具象を描いてきた画家が、具象を捨て抽象へと切り替わる術として、具象的なもの（岩壁）を元に、抽象を模索したと仮定することもできる。

ちなみに、宮崎県出身の画家・坂本正直も、実は同時期に京都の研究所に通っている。河野と坂本の年譜を照らし合わせたところ、河野は1935～1937年に、坂本は1935～1936年と1940年～1941年に研究所に在籍していることから⁶、二人は出会っている可能性があることも、指摘しておきたい。

第3は、ミシェル・タピエと日本におけるアンフォルメル旋風についてである。もちろん、同時期にミシェル・タピエが来日し、アンフォルメル旋風が起きたことも、触れなければいけない。アンフォルメルについて、河野は“たまたまアンフォルメルなんてのが全盛の時代でしてね。そういうものによる影響もありましたけれども画面から形を無くしてみたらどんな風なものになるか、それで始まったんですよ”とどちらかと言えば冷ややかな面持ちで語っている。

⁷第二次世界大戦後、フランスを中心としたヨーロッパで起こった非定形（i n f o r m e l）を志向した前衛美術運動は、中心人物のミシェル・タピエが1956年来日し、アンフォルメル旋風を巻き起こした。河野の発言を照らし合わせると、アンフォルメルにおける思想（たとえば戦後の混沌を描写する、など）において影響を受けたとは言いがたいが、描き方そのものについて影響を受けたという意味では受けとれる。例えば、フォトリエの《無題（四辺画）》（1958年、北九州市立美術館）と河野扶の記録写真番号No. 83やNo. 88（本展出品作品《あ

る風景》1960年、河野扶、個人蔵）⁸ は照らし合わせる価値がある。また、ヴォルスの《構成 白い十字》（1947年、国立国際美術館）と、河野扶の記録写真番号No. 8やNo.



美々津の岩壁

2024年2月24日 筆者撮影



No. 83



No. 88

⁵ 独立美術協会2013年第3号、2014年第4号

⁶ 坂本正直 履歴事項 宮崎県教育委員会

⁷ 映像「アトリエ訪問 河野扶」1999～2000年 高橋章

⁸ 記録写真は、東御市梅野記念絵画館が調査時に撮影したものである。

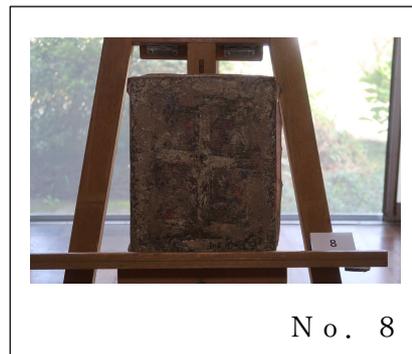
河野扶の葛藤と文化的創造について

14も共通する点が多い。河野はクリスチャンではなかったことが判明している⁹ので、この頃、純粋に十字というモチーフに魅力を感じていたのではないだろうか。これらは、あくまでも描き方における影響に留まるといえるだろう。

第4は、晩年に確立したその作風についてである。独立美術協会在籍時代を振り返って、河野はこう語っている。

“言ってみれば、生命の痕跡を刻んだ壁のような絵で、奈良の寺々の古い土塀の朽ち果てた壁面とか、倉敷でみた土蔵のしみだらけナマコ壁などが私の発想の根底にありました。”¹⁰この主題は、結果的に晩年まで、河野の表現の根源にあったといえる。しかしここで、改めて各時代の表現を比較してみたい。たとえば“第2章 壁こねの時代”と“第5章 作意が抜け落ちていく時代”を比較すると、画面に絵具をいやが上にも厚く塗り上げるやり方ではなく、物質的な厚みよりも精神的な厚みを探求したかのような、洗練された厚みを見てとることができる。それは淘汰された壁ともいえ、長年壁に魅了され続けてきた河野だからこそ、厚みをもたずして時間の堆積や自然物のような様相を彷彿とさせる術を手に入れたのである。また、“第4章 壁こねを下塗にした具象”と“第5章 作意が抜け落ちていく時代”を比較すると、壁の存在が脇役から主役へと這い上がってくる様相がみてとれる。有田四郎、須田国太郎から受けた具象への囚われを、真の意味で振り切ることができたのはこの時期ではないだろうか。つまり、河野が独自の境地へ至ったのは、1993年以降。なんと、80歳になってからなのである。なお、本展にて何度も紹介された書簡の送り先である河野慶彦氏は、書籍『ふるさと美々津』を上梓している。河野慶彦氏はこのために河野扶と連絡をとりあい、幼少期の美々津の様子などを伝えたのではないか。しかし一方で、『ふるさと美々津』に河野扶の記述は無いことを考えると、別の機会で慶彦氏が河野扶自身について記事に取り上げる機会などがあった可能性がある。現段階ではその詳細は不明だが、いずれにせよ、そのやりとりは河野扶が自身の技法や当時の心境などを振り返った貴重な記録となった。

以上、四つの点から河野扶の葛藤と創造について分析してきた。師・有田四郎との出会いによるアカデミックな学び。師とは別の表現を模索し試みた、具象からの解放。解放への手段として手にした、須田国太郎と独立美術協会の存在。憧れの渡仏ののち、作風が淘汰されていき、独自の境地へと行き着いた。河野は常に自身の表現における囚われに葛藤し、創造的破壊を繰り返したと言ってよい。そして河野ほど、語れるペンを持ちながら、自身の作品について語らなかった作家も稀有である。この作家の生き様は、ステートメントを重視する



No. 8



No. 14

⁹ 佐藤和男氏（河野扶の義理の息子）の証言によるもの 2024年3月

¹⁰ 1976年1月14日付け河野慶彦氏宛て書簡

河野扶の葛藤と文化的創造について

現代の美術表現の対局にあるといえる。河野作品の在り方とその意義は、今後ますます評価されていくことだろう。

参考文献

- 茶の本 岡倉覚三 1929年 岩波書店
河野扶展 向うからやってくるもの―作意を捨てて 2021年 東御市梅野記念絵画館
有田四郎―ボヘミアンと呼ばれた芸術家 2016年 手塚恵美子（明星大学研究紀要
人文学部・日本文化学科 第24号）
芸術新潮 2021年9月号 新潮社
堆積 浅川純至 2012年 尾白の森美術館・浅川画廊
壁の意志を聞け 河野扶展図録 2013年 東御市、東御市梅野記念絵画館
ふるさと美々津 河野慶彦 1985年 鉾脈社

本展の開催を機会に、佐藤和男・由起夫妻（由起氏は河野の長女にあたる）より高鍋町美術館へ関連資料をご寄贈いただきました。

ここに資料の概要について記録し、この場を借りて心よりお礼申し上げます。

- ・河野扶随想メモⅠ（1935～1981）データ印刷
- ・河野扶随想メモⅡ（1982～1991）データ印刷
- ・河野扶随想メモⅢ（1992 1月～7月）データ印刷
- ・河野扶随想メモⅣ（1992 8月～1993）データ印刷
- ・河野扶随想メモⅤ（1994～1996）データ印刷
- ・河野扶随想メモ抄 データ印刷
- ・河野扶随想メモⅠ補遺 データ印刷

- ・第六回朝鮮美術展覧会図録 複製印刷物 1927年
- ・河野扶直筆原稿用紙 天皇制を論ず 1946年
- ・独立展出品作品ポストカード5枚 第28回～第32回 1960年～1964年
- ・独立展入選通知1枚 1962年
- ・独立展出品目録 1962年
- ・東京都立小石川高等学校定時制生徒会 紫星 複製印刷物 1967年度
- ・個展案内 1969年
- ・詩集 大河童 宗左近 1969年 彌生書房
- ・個展案内 1973年
- ・毎日新聞 「宮崎の文化 その現状と展望 第三部〈7〉」 1974年3月12日
複製印刷物
- ・西日本新聞 夕刊 「東京近況 河野扶氏」複製印刷物 1977年8月1日
- ・個展案内 1978年

河野扶の葛藤と文化的創造について

- ・月刊青年手帖 扉絵 1978年9月1日発行
- ・宮崎日日新聞「宮崎で初の個展 9日から、河野扶氏」複製印刷物 1979年10月2日
- ・素顔の佐伯祐三 山田新一 1980年 中央公論美術出版
- ・朝日新聞「新人国記続 ふるさと群像②」複製印刷物 1983年5月12日
- ・ふるさと美々津 複製印刷物 1985年
- ・毎日新聞 夕刊 「高橋新吉氏 六十余年の詩的創造」 1987年6月9日
- ・週刊新潮 「五十歳で『普通』の人 ダダ詩人・高橋新吉さん」 1987年6月18日
- ・展覧会案内 1996年
- ・展覧会パンフレット 1996年
- ・展覧会出品作品図版 16枚 1996年
- ・山梨日日新聞「非具象絵画を追求する 河野扶さん」複製印刷物 2000年8月22日
- ・芸術新潮 2021年9月号
- ・河野扶 言の葉集 泉田洋子編 2020年12月
- ・有田四郎ーボヘミアンと呼ばれた芸術家 2016年 手塚恵美子（明星大学研究紀要 人文学部・日本文化学科 第24号） データ印刷

- ・有田四郎作品2点写真 データ印刷
- ・河野扶直筆原稿用紙
グラナドスのアンダルーサ、白ける、白昼夢
- ・宗左近直筆原稿用紙
夢でない夢の音楽 河野扶芸術、日向夏蜜柑 河野さんの世界
- ・河野扶直筆略歴 複製印刷物
- ・河野扶直筆 個展案内への寄稿文（原稿用紙）
- ・宗左近直筆 個展案内への寄稿文（原稿用紙）
- ・河野扶直筆 個展案内への寄稿文 複製印刷物

KAWANO TASUKU

河野 扶 年譜

- 1913（大正2）年 宮崎県児湯郡美々津町（現・日向市美々津）に生まれる
- 1921（大正10）年 父親が南満州鉄道株式会社（満鉄）の病院に赴任（内科部長を経て病院長）したため、家族は朝鮮京城府龍山へ転居
- 1924（大正14）年 朝鮮京城府龍山中学に入学
絵画部の遠田運雄の指導を受ける
第6回朝鮮美術展覧会（鮮展）に初入選
- 1927（昭和2）年 内地に引き上げる
- 1930（昭和5）年 宮崎県高鍋中学を卒業し、東京美術学校を受験するが失敗
有田四郎に師事し、デッサン、油絵を学ぶ
- 1931（昭和6）年 再び東京美術学校を受験するが補欠合格となり、欠員がなく入学できず川端画学校に入学
- 1933（昭和8）年 東京の生活を切り上げ帰郷
- 1935（昭和10）年 京都第三高等学校理科甲類に入学
在学中に京都独立美術研究所で須田国太郎の指導を受ける
- 1941（昭和16）年 東京大学理学部数学科を卒業
三井生命に入社
- 1945（昭和20）年 絵画制作の時間を得るため教職に転じ、以後は旧制専門学校、新制大学、新制高校で数学を教える
- 1946（昭和21）年 毎日新聞社主催『天皇制を論ず』論文募集で最優秀賞を受賞
- 1960（昭和35）年 第28回独立展に「作品1」を出品 会友となる
グループ人間展（新宿画廊）に出品
- 1961（昭和36）年 第29回独立展に「作品61-A」を出品
- 1962（昭和37）年 第30回独立展に「作品62-G」を出品
- 1963（昭和38）年 第31回独立展に「作品63-J」を出品
- 1964（昭和39）年 第32回独立展に「風景2」を出品
- 1965（昭和40）年 独立美術協会を退会
- 1968（昭和43）年 日本美術家連盟会員となる
- 1969（昭和44）年 巴里画廊（東京八重洲）で個展
- 1970（昭和45）年 教職を辞し、渡欧
- 1972（昭和47）年 巴里画廊（東京八重洲）で個展
- 1973（昭和48）年 現代画廊（東京銀座）で個展

KAWANO TASUKU

- 1974 (昭和49) 年 アートプラザで個展 (以後3年連続開催)、浅川純至氏と
出会う
- 1977 (昭和52) 年 あかね画廊 (東京銀座) で個展
- 1978 (昭和53) 年 浅川画廊の主催により東京と甲府で個展 高橋新吉が、
月刊『青年手帖』9月号の扉絵に掲載された、河野扶の
「壁シリーズ 作品61-2」を解説
- 1979 (昭和54) 年 アテネ画廊アネックスで個展
浅川画廊主催により宮崎で個展
- 1980 (昭和55) 年 アテネ画廊で個展
- 1981 (昭和56) 年 浅川画廊主催で高知で個展
この年から1994 (平成6) 年まで浅川画廊主催により東
京と甲府で個展
- 1984 (昭和59) 年 宮崎県立総合博物館に作品が收藏される
この年から1986 (昭和61) 年までシロカネ画廊 (東京)
で個展
- 1991 (平成3) 年 浅川画廊主催により東京アートミュージアムギンザで個展
浅川純至氏が北杜市白州町に浅川画廊を開廊
- 1992 (平成4) 年 北杜市白州町の浅川画廊で個展
- 1994 (平成6) 年 浅川画廊主催により東京アートミュージアムギンザで個展
- 1995 (平成7) 年 すどう美術館の企画によりギャラリーしらの (東京銀座)
で個展
- 1996 (平成8) 年 浅川画廊5周年企画として個展
すどう美術館 (東京町田市) で個展
多摩美術大学附属美術館で「色彩のハーモニー河野扶展」
を開催
- 1999 (平成11) 年 日夏露彦が雑誌『てんぴょう』創刊号に「存在の豊穡に向
って—河野扶」という文を掲載
- 2002 (平成14) 年 東京で没
享年88歳
- 2011 (平成23) 年 東御市梅野記念絵画館に作品が寄贈される
- 2013 (平成25) 年 東御市梅野記念絵画館で「壁の意志を聴け 河野扶展」を開催
- 2021 (令和3) 年 東御市梅野記念絵画館で「河野扶展 向うからやってくるもの
—作意を捨てて」を開催

講演会概要

講演会

会 場：高鍋町美術館多目的ホール

講 師：大竹 永明氏（東御市梅野記念絵画館 館長）

日 時：2024年2月23日（金・祝） 14:00～15:30

本展にて展示した河野扶作品の魅力、河野作品を評価した梅野隆（初代館長）と収蔵までの経緯などについてご講演いただいた。講演会終了後には、参加者からの質問にもお答えくださった。



映像「アトリエ訪問 河野扶」口述

映像コーナー

アトリエ訪問 河野扶

会 場：高鍋町美術館休憩室

時 間：約30分（繰り返し上映）

制 作：TOU映像プランニング

撮影 高橋章 照明 沢田武利

本展では、1999年～2000年にかけて高橋章が撮影した映像が収録されたビデオテープ（VHS）から、河野扶のインタビュー部分のみを編集し、上映した。

※以下の（ ）内は、インタビュアーによる発言。主な発言者は高橋章氏や浅川純至氏であるが、詳細は不明のため記載していない。



口述

【1】

時が流れるままに任せて、それで自然体でいけばいいんじゃないかなって思ってますけどね。若い頃は多少の功名心みたいなものがどっかにあったようですが歳と共にいつしか無くなっちゃって、もう今ははっきり言えば私はカンバス相手に壁塗っているようなもんで壁塗りの職人ってよく言われるんですけどね、そういうことを言われると大変光栄に思ってます。

（先生、壁っていうのは単なる壁じゃなくてその中にいろんなものが塗りこめられ…）

ええ、いろんな情念が塗りこめられて、壁ですけどね。

（同じような壁でもいつも違いますね出てくる作品が全部違いますね。）

映像「アトリエ訪問 河野扶」口述

そう。僕はもう全然それも意識しない。

(これから何が出てくるかわからない、その可能性がりますね。)

それ自分でそう感じるの。何が出て来るか、飛び出して来るかわかんから、毎日面白がってる。始めからシナリオ書いて設計してそれに従ってやるんだったらつまらんよ。こうしてやろうとかああしてやろうとか強いて作品をそんな風に捻じ曲げないからね。だからもうそこに出来た物はそれで、生き物の痕跡であればいいって僕は書いたことあるんだけど。そんな物ができりゃそれでいいと思ってる。

【2】

(テーマを見ますと風食(蝕)とか腐食とか風化っていうテーマをだいぶつけてらっしゃいますけどこれは何でなんですか。)

はい。あれは何でもいいんです。番号付けたいんです。私は。できるなら。だけど今まで何かもっともらしい題をつけてきたから、急にやめるのもおかしいんで。

(風食とか風化とかっていうのは…)

多少時間に関係してるものがあるんですよ。

(そうでしょうね。そうですね。)

(壁っていうものが古くなってきてあるいは出てきてと、そういうふうな…)

そうそう、そういう意味があるんです。

(あるいは朽ち果ててきて…)

(よく詩人とかが縄文のエネルギーがあると。そういう有機的な、連続性っていうか…)

それがあつもんだから腐食とかね。ああいう風化とかああいう題名をつけるようになったんです。

【3】

題名は本質的には符丁※に過ぎないと思つてますから、何でもいいんです。でも今までの事があるから、何や頭を絞っちゃな何かもっともらしい題を考え出しては付けてるんですけども。 ※ふちょう…隠語。合い言葉。しるし。記号。符号。(大辞泉/小学館)

【4】

僕はね1913年、そこに書いてあるとおつり。私のうちは代々の医者で、この医者の家(うち)に生まれましてね、その所在地はそこに書いてある高鍋町ではなくて同じ郡内のいま日向市と言つてますが、そこに組み込まれたんですけども元々は美々津町(みみつまち)っていう町村で言えば町なんです。美々津町という港町ですけどね。これは江戸時代に非常に栄えた貿易港で大変繁盛してたところなんです。そこの医者の家に生まれて。それから親父がやはり医者だった関係で、親父が任地が、京都大学の医学部なんですけど親父は出てから、任地が朝鮮鉄道局の鉄道病院に勤務しておつたんです。その関係で親父の任地の朝鮮と、それから母校の京都大学の研究室は、親父が異動するに従つて僕らも移動しました。中学校時代はもちろん高等学校なんかの進学は夢にも考えてなくて、美術学校に入れればいいと思つて。それでもって有田四郎っていうやはり東京美術学校出身の先生に個人的な弟子入りをして基礎的なもつぱら美校受験のデッサンみたいなものですけどそれから始めたんですけど。その頃描いた静物画がたまたま浅川君のところに今あるんですけどね。親父とは結

映像「アトリエ訪問 河野扶」口述

局中学校を卒業するまで喧嘩でした。なんか口を開くとカッとなって喧嘩をやってましたけど。あまりの頑固さにさすがの親父が音を上げちゃったんですね。中学校はさぼりにさぼってそれで不良中学生のレッテルが押されて、卒業もお情け卒業で。席次もおしりから数えた方が早い。もうおしりから何番目ってくらい。そんな劣等生が高等学校行ってほとんど夢想に近い。それが第三高等学校なんてね、これはもう全然問題にならない高嶺の花。だけど勉強はしましたね。自分の可能性に対する挑戦だもんですからね。これはやりました。本当に中学校で怠けてたおかげでなかなかこれ5年間の課程を今から学習するのは大変だなと思ったんだけど。実は僕が選んだんです。東大の数学を出てすぐに絵の方に行くつもりだったから。ところがちょうど世代が悪くてちょうどヨーロッパで戦争が始まって、そんな向こうへ行くような状況じゃなかったんですから、それでやむなく妥協をよろよろして学校の教師になったんですけどね。その時に職業を持ちながら絵が描けるという、あれは何がいいだろう、結局はやっぱり教師がよかったですね。妥協の生活を十、二十年近く送りましたね。もっとか…17年が…あと5年が旧制専門と新制大学、22年ですね。延々と絵描きの道に入れないで足踏みをしておった訳ですよ。1970年になっていよいよタイムリミットが来たと思って、それで辞めてさっさと行っちゃった。だから私はもう絵描きになろうと思ってたのが私のまっとうな人生であって、後は付けたりみたいなものに、残念ながらなるんですよね。このヨーロッパの風土ってものはどういうものっていうのをかねがね知りたかったと思って。そこで教師を辞めたのを機会にさあっと行っちゃった。もう何にも後は考えないで非常に無責任ですけどね。あとは野となれ山となれみたいなことを言えば非常に無責任になりますけども、非常に切羽詰まった気持ちで行きました。

(どのくらいいらしてらしたんですか。)

ええと一年の予定がね、向うで少し喉の具合がおかしくなって、それで途中で帰って来ました。正確には9ヶ月くらい居りましたかね。ほとんどパリが中心でパリに本拠を構えて安ホテルで自炊をしたり、あるいは向こうで知り合った方の下宿に、行ったりしておりました。その間にスイスとイタリーだけは旅行してノルマンディーからエクスアンプロヴァンスまでフランスは北と南、大体主なところはみんな観たよね。それまで具象画を描いててどうしても僕が教わった先生の面影が出るんですよ。どんなに描いててもどっかに。だからこういう仕事を何年やっても先生の枠内を出る事ができないんじゃないかなあ、なんてことを疑問に思ってた時に、たまたまアンフォルメルなんてのが全盛の時代でしてね。そういうものによる影響もありましたけれども画面から形を無くしてみたらどんな風な物になるか、それで始まったんですよ。それから壁が出て。その壁のような作品を出品してたのが独立。まあ一応それはそれなりに評価してもらったんですけどね。それがフランス行って帰ってきて個展をやる時にはそれじゃあ絵が売れないんで。それでまた形が画面に出てきたんですけど。考えてみるとそれはやっぱり生活ってことを考えたやむを得ない措置で、本当のところはやっぱり壁だったかなあとと思いますね。その生活の危機感っていうものが薄れてしまった頃からまた1960年当時の壁が復活したんです。それでそれがずーっと今日に続いているんですよね。そんなことです。

【5】

下塗りに時間がかかるんですよね。こうやってあれこれとデタラメにやっているうちに自然に構想らしいものが出てきて定着する訳ですからね。

(河野扶、1913年宮崎県生まれ、87歳。東大数学科卒業後、サラリーマンとなるが数学の先生を経えずと一人で絵を描き続けています。)

こうやって塗ってるうちにだんだん色が厚くなる。厚くしようと思ってしてる訳じゃない。自然にだんだん。

(自然になる訳ですよ?)

そうそうそう、やってるうちにね。昔はずいぶん削ったんですけどね、最近削るという作業はやっぱり相当体に堪えるものだからなるべくなら削らんで済むようにやってますからね。従っていろんな厚みがだんだんと増えてくる訳です。だから重くなる。なるべくなら軽くしたくないんですけどね。こうやってだいたい下地を整えにいて、いるうちにだんだんとそれらしいものになる。ほとんど今ナイフを使ってますけど、たまには筆も使うんですよ。

(全体の色調が白とか赤とかどういう、その…。)

いやもう別に理屈は無いんです、そういう気分になった時そうするだけで。私は理屈は嫌いなもんだから。

(最初に白いキャンバスに向かわれて、白で行きたいという。)

いや、行きたいなんてものはない。やってるうちに白いやつは白くなる。赤いのは自然に赤くなる。だからその間のあれがないですね、こうなってこうなってっていう順序がないんです。だからいたって私はデタラメな男で…ハハハ、ほんと我ながらそう思います。だから僕の場合は効果があまりにもピシャッと決まるとというのが怖い。今までの経験から言うとそういう作品は私の場合はたいがいダメなんです。後になってみると。それよかどうして出来たのか自分でもわからないものが非常にいいごとある。

(当然それは描かされているというような、そういう感じになっちゃうわけですね。)

そうそうそう。そういう訳です。もうやってるうちに自然に絵の方でそういうふうにごっこが思ってるようにすうとなっちゃう。それが一番自然でいいようです。こうやってやろう、ああやってやろうなんて思って計画したって私の場合はほとんどだめですね。なにか囚われるという事が、私、非常に不得手になりましたね。昔はもう囚われてばかりおったもんですから。でも囚われても結局あまり結果としてはあまりたいした結果が得られないことを悟ってから、だんだん自分の思う通り気ままにやるようになりましたね。それでもどっかにまだ囚われがあるのかもしれないと思って。それだけはずっと注意してます。なんか既成概念みたいなものがあってそれにどっかで囚われているようなことがありますから。できるなら私の理想は何気なく存在する、そういうものを表現したいです。何気無く。殊更にあるんじゃないくて、何気無くそれがなかなか難しいことですね、考えてみると。どっかにやっぱり人には意識というものがあって、それにどっかで囚われてるってということがありますから。

それはもう大変難しい。変なこと言うんですけどね、私はこれを自分の絵だなんてそういう僭越なことは思ってない、これは生き物の痕跡だと思っています。私という生き物がある時に

映像「アトリエ訪問 河野扶」口述

残した痕跡だと。それ以上でもなさやそれ以下でもない。そんな気持ちでいつもやっております。これもやっぱり私としては無意識のうちに画面構成をやっている訳ですね。やっているうちに何やら作品らしい物ができる。まあ、長い間に自分の手法みたいなものが自然にできてきたような気がします。それがいいか悪いかは皆さんが評価なさることで、自分には何とも言えないんですけど。昔は手を抜かないといかんとこを一生懸命力込めてやって何か検討違いな事を随分した気がする。手を抜くっていう事を覚えてから少し早くなったのかもしれない。

(ただ抜くっていうのと省くっていうのはまたちょっと違いますよね。)

うーん、そらそうだね。分からん。けどまあ、作品の大小によって作品をこういう風にするっていうそういうマニュアルはないですね。同じですよ。大きくても小さくても私にとってはですね。人によっては小品はやりにくいとかいう方もおられますけどね。私の場合はもうどれも同じで、小さくても作品は全力を挙げて描くっていうね。大きいからといって手抜きもしないし。

(体力がいりますよね。)

大きいやつはそれだけ体力がいりますよ。若いころはよかったですけどね。最近はその堪えて。

【6】

僕のやつはもうそれで重ね重ねてできる作品なもんですから、もうその色が極端に言うところの中に押し込められているという風に考えて頂いていい。まあその結局集積が一つの作品みたいになるんじゃないか…。まだ途中だもんですから、これからどう変わるのか分かりません自分でも。

(これからの抱負というか、そういうものは。)

もう抱負なんていう歳じゃないですけどね。まあ、とにかく生きさらばえて少しでも絵を余計に描ければ、と思っております。それだけです。

(まだこの画風は変わりますかね。)

どうですかね。何とも言えないんですが、おそらく劇的に変化を遂げるなんてことはないだろうと思いますけれども、少しずつは変わって行くんじゃないかと思います。まあ僕が生きてる限りはね。今はできる範囲で体力を使っているから。それでもあのでかいやつをだいぶ残してあるんです。裏の方には 130 号なんてのあります。それはまだ着手しておりませんけれども来年早々にやろうと思っています。

(130 号ですか…)

ええ、もう準備してあります。もう下塗りはしてあるんです。あとはいつ着手するかっていう時間の問題だけ。

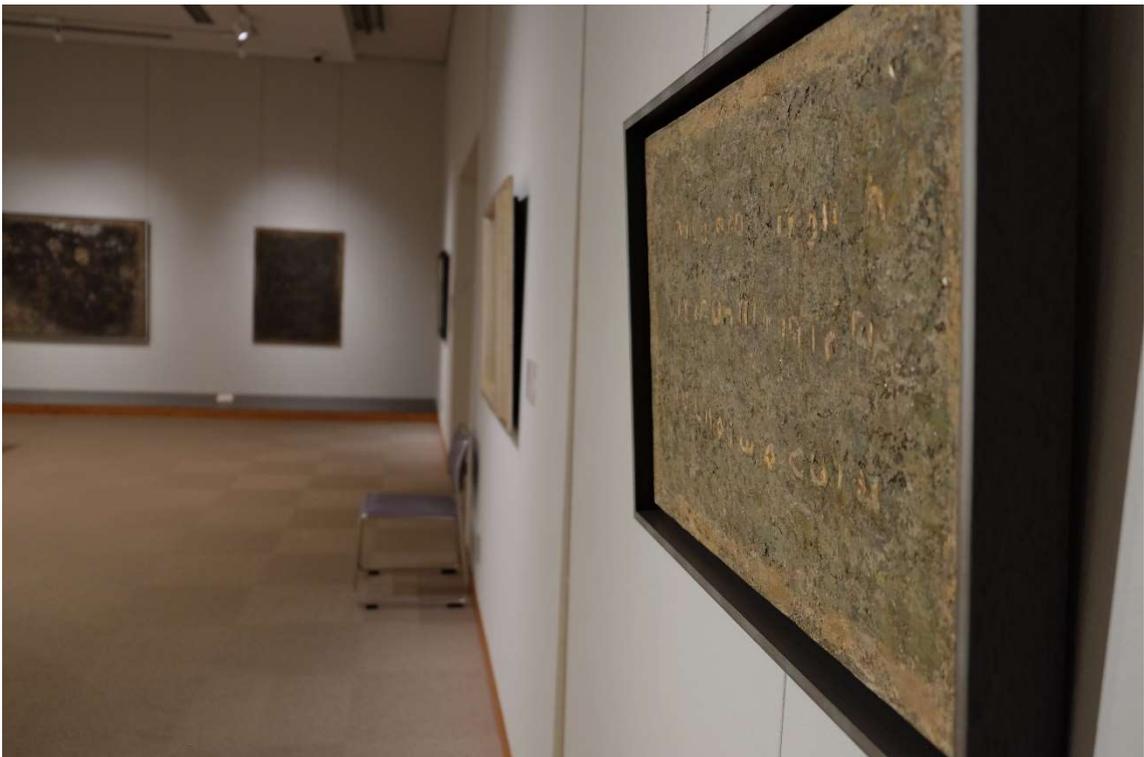
展示風景



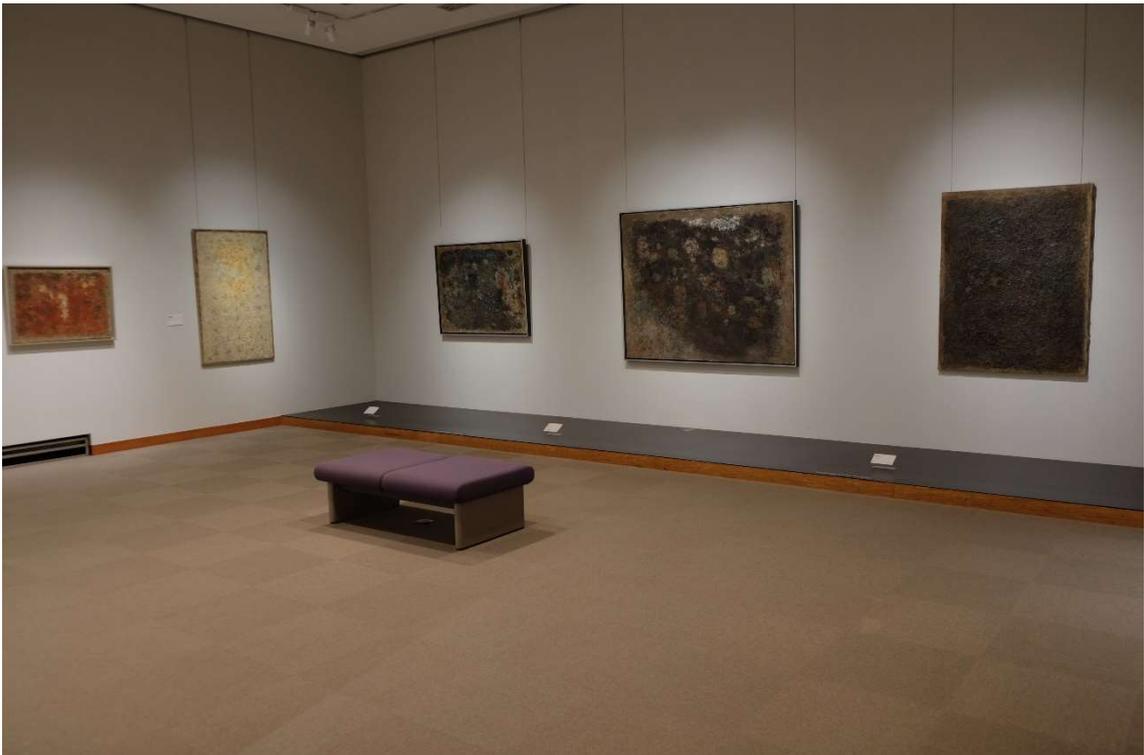
展示風景



展示風景



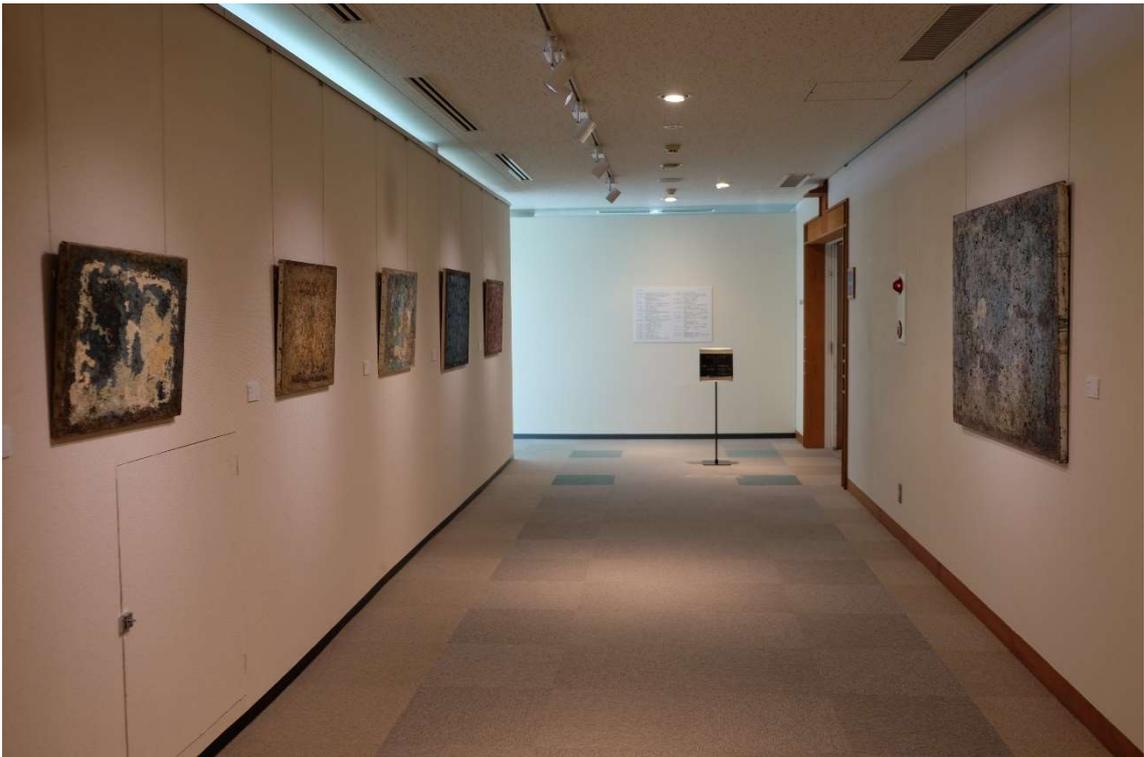
展示風景



展示風景



展示風景



高鍋町美術館
TAKANABE MUSEUM OF ART

河野扶

向うからやってくるもの — 作意を捨てて

2024.2.3sat - 2024.3.3sun

開館時間 | 10:00~17:00 (入館は16:30まで)

休館日 | 月曜日 (祝日は除く) 祝日の翌日 (土日は除く)

観覧料 | 大人300円 (240円)

小中高生・高齢者・障がい者150円 (120円)

本料金に常設展「わたしを解放する—抽象世界にみた夢—」観覧料を含む。

() は20名以上の団体料金またはJAF会員証をご提示の方。

高齢者は70歳以上。障がい者は障がい者手帳所持者とその介護者1名まで。

未就学児と高鍋町内の小中高生および特別支援学校生は無料。

主催 | 高鍋町美術館・高鍋町教育委員会
高鍋町

後援 | 宮崎日日新聞社・MRT宮崎放送
UMKテレビ宮崎・エフエム宮崎

一般展示室・企画展示室1・2

No.	作品名	技法・素材	サイズ(cm)	制作年	収蔵
第1章 具象の時代					
1	青い壺の静物	キャンバス・油彩	53.0×65.2	1930	個人蔵
2	自画像	キャンバス・油彩	33.4×24.3	1956	東御市梅野記念絵画館蔵
3	手をあげる裸婦	キャンバス・油彩	22.7×15.8	1956	東御市梅野記念絵画館蔵
4	人物	板・油彩	33.4×24.3	不詳	東御市梅野記念絵画館蔵
5	題不明 高見清一	キャンバス・油彩	38.0×45.5	1928年頃	個人蔵 (河野扶旧蔵)
6	小さな教会	キャンバス・油彩	22.0×27.3	1956	東御市梅野記念絵画館蔵
第2章 壁こねの時代					
7	作品6 1 - A	キャンバス・油彩	130.3×162.1	1961	東御市梅野記念絵画館蔵
8	作品6 2 - G	キャンバス・油彩	130.3×162.1	1962	東御市梅野記念絵画館蔵
9	作品6 3 - J	キャンバス・油彩	130.3×162.1	1963	東御市梅野記念絵画館蔵
10	風景2	キャンバス・油彩	162.1×130.3	1964	東御市梅野記念絵画館蔵
11	無題1	板・油彩	24.3×33.4	1960	個人蔵
12	壁の詩	キャンバス・油彩	31.8×41.0	1964	個人蔵
13	無題2	板・油彩	24.3×33.4	不詳	個人蔵

作品リスト

No.	作品名	技法・素材	サイズ(cm)	制作年	収蔵
第3章 具象回帰～渡欧					
14	赤い崖	キャンバス・油彩	38.0×45.5	不詳	東御市梅野記念絵画館蔵
15	ローマ遠望	キャンバス・油彩	15.0×22.0	1972	東御市梅野記念絵画館蔵
16	マゼ街	キャンバス・油彩	24.0×17.0	1973	東御市梅野記念絵画館蔵
17	アパートのある風景	キャンバス・油彩	27.3×41.0	不詳	東御市梅野記念絵画館蔵
18	赤い屋根（シャルトル水辺）	キャンバス・油彩	50.0×60.6	1972	東御市梅野記念絵画館蔵
19	風景（作品2）	キャンバス・油彩	38.0×45.5	1966	東御市梅野記念絵画館蔵
20	風景（作品1）	キャンバス・油彩	38.0×45.5	1966	東御市梅野記念絵画館蔵
21	赤い風景	キャンバス・油彩	31.8×41.0	不詳	東御市梅野記念絵画館蔵
第4章 壁こねを下塗にした具象					
22	建物	キャンバス・油彩	15.8×22.7	不詳	個人蔵
23	芽のある静物	キャンバス・油彩	24.3×33.0	1981	個人蔵
24	パレット	キャンバス・油彩	24.3×33.4	不詳	個人蔵
25	オルレアンの子	キャンバス・油彩	41.0×24.3	不詳	東御市梅野記念絵画館蔵
26	モニュメント	キャンバス・油彩	40.9×60.6	1984	東御市梅野記念絵画館蔵
27	蔵造りの店	キャンバス・油彩	53.0×45.5	1980	東御市梅野記念絵画館蔵
第5章 作意が抜け落ちていく時代					
28	壁の曼荼羅4	キャンバス・油彩	45.5×60.6	1993	個人蔵
29	放逸する形1	キャンバス・油彩	38.0×45.5	1997	個人蔵
30	二つの形2	キャンバス・油彩	50.0×60.6	不詳	東御市梅野記念絵画館蔵
31	埋没する相2	キャンバス・油彩	116.7×80.3	不詳	東御市梅野記念絵画館蔵
32	赤の侵食	キャンバス・油彩	60.6×80.3	1999	東御市梅野記念絵画館蔵
33	恣意空間	キャンバス・油彩	130.3×89.4	1996	個人蔵
34	カオス1	キャンバス・油彩	90.9×116.7	2000	東御市梅野記念絵画館蔵
35	気流	キャンバス・油彩	130.3×162.1	2001	東御市梅野記念絵画館蔵
36	黒い気流1	キャンバス・油彩	130.3×97.0	2000	個人蔵
37	刻印	キャンバス・油彩	72.8×91.0	1999	東御市梅野記念絵画館蔵

作品リスト

No.	作品名	技法・素材	サイズ(cm)	制作年	収蔵
38	無題 1	キャンバス・油彩	27.3×41.0	不詳	個人蔵
39	気まま空間	キャンバス・油彩	31.8×41.0	1998	個人蔵
40	私の壁 1	キャンバス・油彩	31.8×41.0	1999	個人蔵
41	翳り2	キャンバス・油彩	27.3×41.0	1998	個人蔵
42	私の壁 1	キャンバス・油彩	41.0×31.8	1999	個人蔵
43	犇めく 2	キャンバス・油彩	45.5×33.3	1996	個人蔵
44	とりとめのない空間 1	キャンバス・油彩	72.8×91.0	不詳	個人蔵
45	私の壁 2	キャンバス・油彩	45.5×38.0	1999	個人蔵
46	恣意空間 1	キャンバス・油彩	38.0×45.5	1995	個人蔵
47	ある風景 1	キャンバス・油彩	53.0×45.5	1960	個人蔵
48	形象 1	キャンバス・油彩	45.5×53.0	1994	個人蔵
49	形の記憶	キャンバス・油彩	41.0×60.6	1999	個人蔵
50	けはい 1	キャンバス・油彩	97.0×130.3	2000	個人蔵
51	私の壁 2	キャンバス・油彩	45.5×60.6	1999	個人蔵
52	石化 2	キャンバス・油彩	50.0×60.6	不詳	個人蔵
53	遊戯空間	キャンバス・油彩	53.0×65.2	1999	個人蔵
54	呪文の壁 (青)	キャンバス・油彩	65.2×80.3	不詳	個人蔵
55	呪文の壁 (赤)	キャンバス・油彩	60.6×72.7	不詳	個人蔵
56	けはい 3	キャンバス・油彩	97.0×130.3	2000	個人蔵

休憩室

57	アトリエ訪問 河野扶	映像	約30分	1999～2000	
		制作 TOU映像プランニング 撮影 高橋章 照明 沢田武利			

河野扶展 向うからやってくるもの — 作意を捨てて

会 期 令和6年2月3日(土)～3月3日(日)

開館時間 午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

休 館 日 毎週月曜日(祝日の場合は開館) 祝日の翌日(土日の場合は開館)

観覧料

大人 300円(240円)

小中高生・高齢者・障がい者 150円(120円)

※()内は20名以上の団体料金またはJAF会員証をご提示の方。高齢者は70歳以上。障がい者は障がい者手帳所持者とその介護者1名まで。未就学児と高鍋町内の小中高生および特別支援学校生は無料。

会 場 高鍋町美術館

主 催 高鍋町美術館・高鍋町教育委員会・高鍋町

後 援 宮崎日日新聞社・MR T宮崎放送・UMKテレビ宮崎・エフエム宮崎

作品数 57点

職員(令和5年度)

館 長 萱嶋 稔

副館長 佐藤 英伸

総務学芸係

係 長 中尾 英子

学芸員 青井 美保

事務員 梅田 朋子

写真提供

東御市梅野記念絵画館 (pp.22-23)

高鍋町美術館

令和6年4月印刷

令和6年4月発行

発行者 高鍋町美術館

宮崎県児湯郡高鍋町大字南高鍋 6916 番地 1

TEL0983 (23) 8887

印刷者 高鍋町美術館

宮崎県児湯郡高鍋町大字南高鍋 6916 番地 1

TEL0983 (23) 8887

Printed in Japan ©高鍋町美術館 2024 ©2024,Takanabe Museum Of Art
